

医療タイムズ

週刊医療界レポート

2011.1/17 No.1996



特集

どうする!?

社会保障財源

タイムスインタビュー

消費税にこだわらず
全般的な税制改正による財源論を

厚生労働大臣政務官・医師

岡本充功氏

グラフ北から南から No.237

医療法人 健生会

とんご

土庫病院

(奈良県大和高田市)

冬の時代の診療所経営 第10回

医聖・関寛斎の志に学ぶ診療所経営

(その2)



医療法人社団裕和会理事長
長尾クリニック院長 **長尾 和宏**

1958年香川県生まれ。東京医科大学卒業。尼崎市医師会地域医療連携・勤務医委員会委員長。尼崎市医師会内科医會前会長。医学博士。著書「町医者力」「パンドラの箱を開けよう」(エピック)「在宅療養を支えるすべての人へ」(共著、健康と良い友だち社)など

HP <http://www.nagaoclinic.or.jp>

ブログ <http://www.nagaoclinic.or.jp/doctorblog/nagao/>

寛斎が72歳を迎えた頃、「医療だけでは病を治すことはできない」と考え、また「理想郷作り」を目指し、徳島における家財一切を売り払い、徳島から賛同者を引きつれ北海道十勝(現在の北海道陸別町)に入植した。当時の十勝は条件の悪さから、開拓はほとんど行われておらず、まさに原野を切り開く作業だった。作った作物は獣に食いつくされ、牛や馬は大雪や疫病で大半が失われる有様。賛同者は次々に徳島に戻る旨を訴えたが、寛斎だけが「例え最後の1人になろうともこの地の開拓に命をかける」と宣言し、その気迫に圧倒され多くの者が踏みとどまったとされる。徳島同様、無料診療を続けながら、一方で小作人に土地を無償で分け与え、囚人更生にも開拓を通じて尽力した。しかし結果的にはこのことが子息たちとの間に財産分与問題を発生させ、寛斎の「理想郷作り」における障害となった。その絶望の中で82歳の時、陸別の地で自ら命を絶つこととなる。

今、日本では医療崩壊が起こり、介護難民が多く生まれ、社会保障はどんどん貧弱になり、日本全体がどんよりした空気に包まれている。1つ1つを政治課題として地道に解決されることが重要だと思う一方、「それらの克服だけでは医療再生は難しい」とも感じる。では一体何が必要なのか？ それは医師が、医療従事者が、または政治家が、そして国民全員がこの「寛斎の心」を持つことではないのか。寛斎は「医術だけでは病は治せない」と述べ、また「我利」ではなく「利他」の精神の重要性を説いた。「最近の医者は『医術』を栄達的手段と勘違いしている」と嘆いていたという記録も残されている。

長崎への遊学から帰ってきて医院が繁盛すればうれしに違いない。殿様の典医ならば周りは毎日丁重に

扱ってくれる。官軍の野戦病院長として多くの人の命を救ったのなら、多額の金品を受け取っても何ら後ろめたいことはないし、明治新政府で要職を求めても不思議ではない。医学校の一等教授や病院長も客観的には良い立場だ。それらを惜しげもなく捨て去り、自らの理想に邁進する寛斎は「奇人・変人」なのかもしれないが、彼はそれら自体を目的として生きること何ら価値を見いださなかった。自分の能力や想い、仕事社会に還元されていくことこそが、彼にとっては究極の自己実現だったのである。

以上、私なりに、関寛斎から教えられたことを2点強調したい。1点目は、「子孫に美田を残さず」。関寛斎といえども、最後は遺産相続でつまずいた。彼も人の子だったのか。開業医も政治家も、2世そのものが悪いわけではなく、子孫に美田を残そうと考えることが、現代における諸悪の根源ではないのか？

2点目は、ハーバード大学のマイケル・サンデル教授の「正義の授業」ではないが、医師とは本来、「正義」や「哲学」の実践者ではないだろうか。こんな青臭いことを書くのは正直恥ずかしいが、新年に免じて許していただきたい。その、実践とは、医師会活動を通じて、地域活動、学校保健、産業保健などに貢献することであり、診療所経営者こそが最も行きやすい立場にいると考える。